

# 平成30年度第1回鳥取県総合教育会議 議事録

## 1 日時

平成30年6月11日（月） 午後2時から午後4時まで

## 2 場所

鳥取県庁 議会棟3階 特別会議室

## 3 出席者

知事 平井伸治  
教育長 山本仁志  
教育長職務代行者 中島諒人  
教育委員 若原道昭  
教育委員 坂本トヨ子  
教育委員 佐伯啓子  
教育委員 鱸 俊朗  
教育委員会事務局 理事監兼博物館長 田中規靖  
教育委員会事務局 次長 森田靖彦  
教育委員会事務局 教育次長 足羽英樹  
有識者委員 青戸 忍  
有識者委員 石原太一  
有識者委員 大羽沢子  
有識者委員 津島 望  
有識者委員 長曾加奈子  
有識者委員 横井司朗  
事務局 元気づくり総本部長 加藤礼二

## 4 あいさつ

### (加藤部長)

- ・第1回総合教育会議を開催する。はじめに平井知事から挨拶を申し上げる。

### (平井知事)

- ・台風5号が日本の南海上を通過しているところであり、そんな雨の中お集まりをいただき、感謝申し上げます。また日ごろ、鳥取県における子ども達のすくすくと育っていく未来を皆様の手でつくっていただいていること、心から感謝申し上げます。
- ・私ども鳥取県は、実は国の制度改正を先取りして進めており、どうしたら住民の皆様の思いが教育行政に反映し得るかということで県独自にこの会議を始めた。今では国の制度になっているが、それと同じ流れの中で教育委員会の制度改革も行われたところ。今までどおり、是非、皆様のいろんな知恵と行動をこの教育の中に活かしていただきたい。
- ・学力テストの結果を見ると、最近はちょっと貯金が減って大体全国平均並ぐらいかどうかとあったところ。かつては、特に国語などはいい調子だったが、いまはやはり全国の競争もあるのだと思うが、これらに対する対策が必要である。英語教育においては、鳥取県では英語を教える先生方の英語力はすごく高いが、生徒の英語力はさほどでもないというギャップもあるため、この辺りはやり方の問題もあるのかもしれない。
- ・また、鳥取県の永年の懸案だった美術館問題についても、いよいよ道筋が付き始めた。6月県議会が始まり、PFI方式を導入しながら業者や議員の皆さんとすり合わせをし、美術館の中身を具体的化していく作業に入っていく。

- ・教育現場における働き方改革においては、ルーティン的な事務作業に時間が割かれ過ぎないように、学校業務支援システムを導入したところ。
- ・これらと併せて、本日、皆様にひとつ御説明させていただくのが文化財保護行政の知事部局への移管について。先般、文化財保護行政を知事部局に移すことができる法律改正がなされ、平成31年度以降、そういう移管ができることになったが、鳥取県ではかつてスポーツなどを移管した実績もある。この度の法改正により、特に市町村の権限が増すので、市町村もしっかりとてこ入れをしながら移管をするというのもひとつの手なのかなと思う。
- ・いろいろ課題がある中、本日の議題、あるいはそれ以外のことで大変気になるようなことがあるかと思う。そうしたことをお寄せいただき、今年度の教育行政へ活かしていきたい。
- ・「五月雨や 少し抱かれて 睡りし子」という中村汀女の句がある。ちょうど雨音が何か子守唄のようにも聞こえる、そんな季節になってきた。少し抱かれて眠りに落ちる、すやすやと眠る子が描かれているが、鳥取県の子育て環境は全国でも指折りではないかと思う。
- ・すばらしい子ども達の未来が開けるように、是非とも皆様からお力添えをいただければありがたい。今日御出席いただいたことに御礼を申し上げますとともに、積極的な御意見、御指導いただくようお願い申し上げ、冒頭の挨拶に代えさせていただきます。

**(加藤部長)**

- ・引き続き、山本教育長にご挨拶をお願いします。

**(山本教育長)**

- ・平井知事はじめ有識者委員の皆様には平素より鳥取県の子ども達のために御尽力いただき、また、本日はお忙しい中、こうして御出席いただき、貴重な御意見をいただくこと心より感謝申し上げます。
- ・これまでも本当に貴重な御意見、御提言をたくさんいただいた。例えば市立米子養護学校の県立への移管、先ほど知事からもあった美術館の話、また英語教育においては親子で楽しむ教材づくりや、まずは正しい発音を理解することが重要であるといったこと、いじめなどの問題へのICTを活用した相談体制の構築など、これまでいただいた御意見、御提言から今年度の当初予算においてかなりの部分を事業化させていただき、あるいは夜間中学などは御提言をいただき、この度検討を進める運びになったところ。
- ・これから私どもこの県の教育行政にしっかりと活かして取り組んで参りたい。
- ・知事が策定された教育に関する大綱は、今年度最終年度を迎え、仕上げの年となる。併せて、県教育委員会が策定した教育振興基本計画も最終年度を迎えるということで、まさに仕上げの年となる。
- ・今日はまたたくさんいろいろな御意見をいただくようお願い申し上げ、冒頭の挨拶とさせていただきます。

**(加藤部長)**

- ・それでは意見交換に入る。事前に配布した資料を簡潔に説明させていただく。まず資料1・平成29年度教育に関する大綱（第二編）の評価について、森田次長に説明をお願いします。

**(森田次長)**

- ・教育に関する大綱の評価について、資料1-1をご覧くださいければと思う。大綱に掲げる指標の達成状況については、全81項目中、「達成」、「おおむね達成」が56項目で、割合としては全体の69%、さらに未評価を除くと81%となるなど、順調に成果を上げている。
- ・達成したA評価及び未達成だったC評価の項目はいずれも13項目。それぞれ主なものを掲げているが、課題のある主な項目に対する今後の取組について、簡単に説明させていただく。
- ・大きなポイントとしては、学力・学びの質。まずひとつは、算数・数学の基礎的・基本的事項の習得で、平均正答率あるいは最上位層、最下位層の割合等が全国平均を下回っている。次に、中3時と小6時の各教科の最上位層、最下位層の割合において、小6時に比べて中3

時の生徒は最上位層の割合が下がり、最下位層の割合が上がっている状況。さらに、わかりやすい授業や勉強することの充実感を感じる生徒の割合でも目標値を下回っており、改善に向けた取組の必要がある。

- ・学力・学びの質については、資料の囲みに掲げているが、今年はテーマを絞って地域ごとに、それも県と市町村、学校現場が一緒になって取り組んでいる。東部は家庭教育の質の向上、中部は全国学力学習状況調査と各授業の単元とを連動させた問題集の作成など。西部においては、教員の更新代謝が進んでいることから若手職員の力をつけていくような取組を進めており、これら以外にも、これまでどおりのとりっこドリル等も進めているところ。
- ・教員・生徒の英語力については、従来の取組に加え、教員の英語力向上のためのセミナーやすべての教員に対する外部試験活用の義務化のほか、エキスパート教員の授業公開、また、スタンフォード大学との連携の遠隔講座などの取組を進めている。
- ・地域や社会で起こっている問題等への関心や地域行事への参加については、やはり郷土を愛する心、それから地域のよさを学ぶ取組が必要であり、南部町や倉吉市での地域学習をはじめ、青谷高校や鳥取中央育英高校などの県立高校での取組、また最近の新聞報道等であった日野町のJK課という、女子高校生ということと地元改革という言葉を掛けた「JK」課の取組を進めているところ。
- ・また、日本財団と連携として、公立・私立合わせ、日々地域活動等に興味を持っている学校の生徒がこの8月に大山で合宿をしながらいろいろな課題を研究するといった「ソーシャルイノベーションハイスクール」に取り組もうとしている。
- ・もうひとつの大きな柱、体力・運動能力・スポーツについては、体力・運動能力調査の上位層の割合の低さ、全国平均を下回る長座体前屈への対策として、今年、教育委員会が開発し、三朝西小学校で取り組んでいる1分間の簡単な体操「ワンミニッツエクササイズ」の全県域への普及を目指した取組を進めているほか、従来の取組ではあるが、遊びの王様ランキングについても取組を進めていきたいと思っている。

#### **(加藤部長)**

- ・資料1の後ろに配布している参考資料・全国47都道府県幸福度ランキングにおける本県の状況については、本日の意見交換の参考のひとつにいただければと思う
- ・続いて、資料2・英語教育の推進について、資料3・高校の特色化・魅力化の取組について、資料5・高大接続改革への対応について、足羽教育次長に説明をお願いする。

#### **(足羽教育次長)**

- ・まずは資料2の英語教育の推進については、先ほど、平井知事、山本教育長も触れたようにいよいよ平成32年度から小学校の外国語活動及び外国語が教科化されるため、これに先立ち、昨年度からすべての小学校教員を対象に研修会を実施してきた。この中で、現場の職員から課題の(2)①に掲げているように、これまで英語指導の経験がないため英語指導への抵抗感や不安があるといった声が強いことから、担任が指導していくという基本線に加え、英語の専科教員等による指導ノウハウの普及などの対応策をいくつか既に取り入れている。
- ・ひとつは校区内の中学校の英語教員が小学校に出向き、指導、助言等を行うことで、授業のあり方を築いていく取組。2つ目は、教材をデータ化し、誰もが進度に応じた教材を使えるシステムの活用。それから、先ほども紹介のあった家庭内でも英語に慣れ親しんでいただくことを目的とした日めくりカレンダー。これは9月に間に合うよう現在作成中であり、日常生活で使用できるような身近な素材を使って、家庭の中でお父さん、お母さんと一緒に英語に触れられるような、そういうふうな仕掛けも進めて参りたいと思う。
- ・2つ目として、中学校、高校における英語教育の生徒側及び教員側の課題だが、3ページ目の別添資料の一番下に昨年度の英語教育実施状況調査、国調査の結果を挙げており、28年度との比較において、中学生、高校生ともに全国的に見れば34位、35位と若干低めであると

ともに、中学校の教員の英語力も 36 位と若干上昇はしているが、まだ向上を図っていくべき課題があるところ。これらに対し、生徒の英語力、教員の英語力向上に関する取組として、中学校では、全生徒を対象に外部検定試験の受験料を補助し、これにより得られた客観的なデータを基に、どんな部分に力を入れた指導が必要か等、授業改善に活かしていきたい。また、高校生では、スタンフォード大学との交流が 3 年目に入り、グローバル・リーダーズ・キャンパスの取組においては、今年、鳥取西高の生徒が国連本部で開催された高校模擬国連国際大会に日本代表として出場するといった実績も出てきており、是非、生きた英語に触れることができる、こうした取組を充実させていきたいと思う。

- ・続いて資料 3・県立高校の特色化・魅力化、県外募集等について説明させていただく。生徒数が減っていく中、入学者が募集定員に満たない学校が見られるようになっており、平成 28 年度入学者選抜からは推薦入試において県外の生徒募集等にも取り組み、智頭農林や日野、岩美といった中山間地に位置する高校については地域と連携した学校の魅力づくり・特色づくりにも力を入れているところ。
- ・その中で、県立高校の特色化・魅力化づくりの一端として重点校制度の取組をスタートさせた。それぞれの学校において、いくつかある重点項目のうち、学校の特色に見合った項目を 2 つから 3 つ選択し、その学校がどういったことを重点に置いて教育を推進するのか明確化して中学生等へ PR するなど、目に見えるような形で進めている。
- ・入学生確保に向けた取組状況のひとつ、県外生徒の推薦入試は平成 28 年度から始めたもので、推薦入試による入学者は 28 年度が 4 名、29 年度が 10 名、30 年度は 14 名と徐々に増加している。ただし、やはり県外から来ていただくには、生徒の住環境整備がひとつの大きな課題のため、このことについて民間活用や地域連携、または県直営などいろいろな手法について、現在、検討しているところ。
- ・最後に資料の 5・高大接続改革への対応については、いま現在、文科省において、資料の 1(2)に示しているような大学入試の改革が進められており、現在、マーク方式で行われているセンター試験が、国語及び数学で一部記述式問題が出題されるようになることから、思考力、判断力、表現力といった、一時、アクティブラーニングという言葉で言われたこの 3 つの力を一層重視していくための授業改革が必要となる。また、もう一点の英語については、従来の聞く・読むに、話す・書くを加えた 4 技能で測る民間の試験や検定試験の実施といった点が高大接続の大きな変更点である。これらに対応するため、本県では平成 24 年度から、本ページの「2 本県の取組」(1)、(2)に掲げる授業改革の取組を一体的に進めるとともに、バランスのよい英語の 4 技能の育成に向けた取組も今年度から新規にスタートさせたところであり、今後も国の動きを注視し、しっかり状況把握しながら取組を進めて参りたい。

#### (加藤部長)

- ・続いて、資料 4、カラーの A 3 判の 1 枚ものについて、田中理事監に説明をお願いする。

#### (田中理事監)

- ・資料 4 について、第 3 章の必要な機能と主な事業展開というところまでは、前回 1 月に開催したこの会議において概要説明させていただいており、この度はその説明を省かせていただきたい。その後、基本計画の検討をさらに進め、第 4 章、第 5 章をまとめ、全体の案として、現在、県民の皆様へ御提示している。まず、第 4 章を簡単に説明させていただきたい。右肩に建設場所として写真入りで表示されているが、これは平成 28 年度に、この倉吉市への立地が決定しており、その規模とかどのように整備していくかといった点については、4 章の下 4-2 の「施設設備の整備概要」で示しているとおり、全体で 9,910 平米、概ね 1 万平米の規模の美術館を整備したいと考えている。また、整備費用の想定については、その下 4-4、これは県が直接工事をした場合という想定ではあるが、建設工事費が約 77 億円、その他の経費が 20 億円、計 100 億円を少し下回るような金額を想定している。

- ・冒頭の知事からの挨拶にもあったPFIという手法を導入し、財政負担の削減を図ることとしている。その下括弧で書いているPFIの中でBTO、ビルト・トランスファー・オペレーションと言って、まず民間が建設した後、トランスファー、つまり県に所有権を移管して、オペレーションはまた民間に行っていただくという、そういう形の取組を進めていきたいと考えている。
- ・その下、第5章における5-1組織体制については、BTOということで基本的には民間に運営をしていただく訳だが、特に学芸部門については、枠囲に書いており、作品収集や調査、研究、展示、教育普及といった部分はコアな業務として、引き続き県が所管するといった整理をしている。そして一番下、5-6今後のスケジュール等にあるように、今後、事業者の選定、設計そして建築工事と移り、平成36年度中の開館を目指すスケジュール感である。
- ・現在、こういったハード面の手続きも進めながら、資料の真ん中辺りにある美術館等連携の具体的な方法の先事業であるとか、当美術館の目玉のひとつ美術ラーニングセンター機能を展開していくために、例えば学校現場の対話型の観賞事業を今年度から県西部、境港等でも開催をするように進めるとともに、県内にある美術館の連携促進に関する計画も立案し、そういった連携を図っていく取組も、その他ソフト面の取組に併せて進めたいと思っている。
- ・これらについて委員の皆様から御意見や御示唆いただきたい。

#### **(加藤部長)**

- ・続きまして最後、資料6・文化財保護行政の知事部局への移管について。これは地教法の一部改正により、教育委員会が所管することとなっている文化財保護の事務が首長部局でも所管できるようになったことが背景。この文化財の保護と地域振興、また観光振興としての活用、資源としての活用を総合的に連携して進めることで、文化財に対する地域住民の理解が進み、また多様な文化財を確実に次世代に継承していくために、知事部局への移管に向けた検討を始めてはどうかと考えている。
- ・本県では平成20年度に文化に関すること、また平成26年度にスポーツに関することを移管し、教育委員会及び地域と連携して事業展開しているところ。メリット等少し書いているが、今後、保存と活用双方を理解して推し進める体制、また学校教育との連携が取れる仕組みなどの検討を進め、最短で来年2月議会で条例を提案し、来年度からの移管を想定というスケジュール感になろうかと思っている。
- ・これからは各委員から順に御意見を伺いたい。まず、横井委員から願います。

#### **(横井委員)**

- ・今回、一番申し上げたいと思うものが英語教育のところ、長曾委員もいらっしゃるから、また別の見方もあるかも知れないが、今、我々の青翔開智中高で大事に考えていることは、英語力をつけるだけでは全然英語は使えなくて、英語を使う「マインド」を育てることがとても大事だとして、この「マインド」を育てることを中心に据えて学校で計画を立てている。
- ・そのためには「勇気」、「好奇心」、それから「多様性を認める」といった3つの力が必要だとして、勇気、好奇心、多様性を認めるという3つのことを具体的にできるような機会の創出をいろいろと考えている。例えば、今、青翔開智中高でもものすごく英語熱が高まっているが、大体中学3年生になると、全員が英検3級を取っており、このうち36%が英検準2級以上になっている。文科省の目標では、中学卒業時点で英検3級を取っている生徒が36%といった目標であり、それに比べたら、今、とんでもない数字になっており、高校1年生に至っては英検準2級がだんだん当たり前になりつつあるというような状況で、非常に英語熱が高まってきている。
- ・もうひとつは、次々と外国に目が向き始めた生徒が増えていることで、今年アメリカに1年留学、デンマークに1年留学、それから少年少女国連大使に1名、それから、どこだったか

忘れてしまったが、生徒がいなくなるんじゃないかというくらい、たくさんいろんなところに出かけ始めている。すなわち、今までどちらかという内向きだった鳥取の子ども達が、今、どんどん外を向くようになっており、これまでの取組も何かの効果はあったかなと感じている。その効果の一番初っ端として、我々が行っているイングリッシュキャンプの取組が、どうも大きな効果を上げているようである。これは、夏には鳥取で開催し、冬は京都で開催している訳だが、海外の有名な大学、例えばスタンフォード大学、ハーバード大学、マサチューセッツ工科大学やロンドン大学などから学生を募集し、試験を行った上で、ある程度以上の学生5、6名に日本に来てもらって、うちの学校の生徒とグループをつくって、2泊3日で英語づけの勉強を行う。

- ・相手は英語しかわからないため、何としてもコミュニケーションを図らないといけない訳で、さらに、ただ一緒に過ごすだけではなくて、課題が与えられるため、その課題について2泊3日のうちに何とかコミュニケーションを図って仕上げなければいけない。仕上げた結果は3日目の最終日に発表する機会があり、それをまた英語でプレゼンテーションさせる訳です、無理やり。このようなことを夏にやって、それから冬には他の中高の生徒と一緒にあって、大体相手は同志社中高か立命館宇治のどちらかだが、京都を会場に2泊3日で行っている。
- ・このイングリッシュキャンプに参加した生徒達の英語への目覚めが早くて、参加して以降、だんだんだんだん火がついていっているように思う。しかも、どうやら先ほど言った「マインド」の部分も育ってきているようで、それをきっかけに海外の学生等と友達になるとか、ホームステイを通じて家庭全体で何か外国とつながっていくようなことが起きるなど、非常に良い効果を上げていると思っている。ですから、このような取組を是非、何かの形で取り入れていただければいいんじゃないかなと思う。
- ・それからもう一点、高大接続について。これも前回申し上げたかも知れないが、いま一番、高大接続のところで気がかりなことは、大学入試改革について高校の先生はよく御存知だが、中学校の先生がこれについての説明が出来ないこと。要は中学校から高校に進路を選ぶ際に、これからの大学入試、あるいは就職も含め、日本の世の中がどのように変わろうとしているのかということ、少なくとも中学3年生の段階で話をしなないと、本来、自分の進路を選ぶこと材料になっていないもの考える。
- ・いま現在、中学校の先生からは何の説明もないので、保護者の方も実は知らない訳で、私達の学校に来られて、説明会等で“初めて聞きました”といった方がたくさんいらっしゃる。中学生自身あるいは保護者への情報発信と言いますか、そういった部分が今、欠けていると思うので、是非その部分も重点的なこととして、これから取り組んでいただければと思う。

#### **(加藤部長)**

- ・続いて長曾委員にお願いする。

#### **(長曾委員)**

- ・先ほど横井委員の話にもあったとおり、やはり日本の生徒にはアウトプットの機会が非常に少ないので、それによってモチベーションが上がらないということが問題のひとつだと思う。横井委員がされているイングリッシュキャンプのように、英語でプレゼンテーションする機会があり、そこに向かって生徒自らが英語を話そうという気持ちが高まっていくということが非常に理想的ではないかと思う。どちらにしても、学校の教育だけで話せるようになるのはまず100%無理だと思うので、楽しい、話せるようになりたい、家で練習したいと思わせるきっかけを与えるような、やはりアウトプットの機会を準備してあげることが必要だと思う。
- ・それから、高大接続の話で、保護者の方があまり御存じないというお話があったが、これは私もよく実感する。中学校1年、2年の生徒の親御さんとお話すると、スピーキングが大学入試に必要なことを知らない方がたくさんいらっしゃるの、やはり中学校の段階からスピーキングに関して意識していかないといけないと思うが、まだまだ浸透していないので

はないかなと実感している。

- ・中高の英語教育における課題と分析の中で、中高生の英語力が伸び悩んでおり、課題として従来型の入試即応型指導がまだ行われている、また日本語による授業がまだ行われているといった点が示されているが、これは現場の先生からすると、ある程度入試即応型指導になることは仕方がないのではないかなと思う。多分、現場の先生方は板ばさみになって苦労されているのではないかなと推察するが、4技能統合型の授業実践を目指して指導改善と言っても、そもそも入試に合格しなかったら、4技能統合型の授業だけでは無理だと思う。4技能統合型、アクティブラーニング型の真に効果的な方法論が確立されて行われているとはちょっと思えないので、多分、日本全体的に手探り状態の部分があるのではと思う。それを推し進めることによって、結果的に生徒が置き去りになりがちの部分もあり、結局生徒は予備校に通うことになる訳だが、予備校では基本、きちんと説明しないと複雑な構文の把握など難しいことから、すべて日本語で授業が行われている。これではちょっと本末転倒かなと思うが、特に難関国立大学二次試験の英語レベルが日常程度の英語のコミュニケーションとはレベルの乖離があるということをお聞きいただきたい。みんな日本語を話せるけれども、現代国語の問題は解けないというのと同じこと。やはり話せたとしても、問題を解くのはまた別の問題。実際、きちんと訓練すれば、日常生活に必要なことは普通に話せるレベルに到達することはさほど難しくないとと思う。
- ・大学入試、それが落とすための入試である以上は、対策も行っていかなければならないし、入試対策と話せるようになることの両立を考えたときに、4技能統合型だけで推し進めることはちょっと無理なのではないかと、私の意見だけでも思ってしまうので、スピーキングは、もはや別科目として扱っていただいてもいいくらいだと思う。スピーキングだけに特化した時数を確保し、評価も口頭試問で行う。それと入試用の読解の対策の授業というのとは、やはり一緒にしても、なかなか効果が出ないのではないかなと思う。これから英語の試験について、大学入試改革の変化というものが、まだはっきりしないため、今後の国立大学、特に二次試験、一般選抜の形がどのように変化していくのか注視しながら議論していく必要があると思う。
- ・現場にいて、生徒の不満で一番多いのは、説明がないからわからないというもの。やはり、4技能統合型やアクティブラーニングとか、現場で推し進めていこうと思われている指導が、実際には、生徒が納得して、理解してからそれを応用していくといったプロセスにちゃんとになっていないのではないかなと思う。やはり情報の整理をしてから練習、アウトプットというふうに移行していかないとあまり意味がないのではないかな。生徒が納得する、理解するというプロセスがないまま、いきなり応用に行ってしまうところが少しあるのではないかなと思う。その辺はオールイングリッシュだけにこだわらず、最初に、やはり説明の部分はしっかりと納得させるというプロセスを行ってから応用に移行していただきたいかなと思う。
- ・それからスピーキング指導について、これは訓練の時間のような形で、朝読書みたいな方法でもいいのだが、毎日簡単なフレーズを一緒に練習するとか、小学校の先生でも誰でもCDがあれば実践できると思うので、毎日一緒に簡単なセンテンスを発音する、繰り返して続けさせる、それを身に着けさせる練習の時間というのを取ってみてもいいのではないかなと思う。
- ・あとは暗唱。生きた英語にこだわりすぎず、昔の人が書いたよい文章を丸覚えするというのもいい方法だと思うので、レシテーションをみんなでやるとか、また日めくりカレンダーも使わないともったいないので、活用方法を学校で指導していただくことも重要だと思う。

#### (加藤部長)

- ・続いて津島委員にお願いします。

#### (津島委員)

- ・保護者の立場として、お話をさせていただく。まず、高大接続改革が話題になっているが、

先ほどからおっしゃっているように、中学校の先生はあまり理解されていないように思う。実際、うちの子どもが、平成32年度から始まる新制度の最初の受験生になる学年、いま高校1年生だが、昨年度末ぐらいになってようやく、英語の試験において、スピーキングだとか、今までよりも少し範囲が広がるといったことを保護者が認識し始めたところ。

- ・そのため、中学校の段階ではスピーキング等の対策がなされていなかったのではないかなと思うとともに、高校に入学して以降、3年間という短い間で、その32年度の受験への対策について、十分に対応しきれぬのかどうか不安を感じている。
- ・制度の変わり目といったタイミングでもあるため、保護者としても早め早めに意識しないといけなかったなという反省もある。子ども達が、学校でどういったことを学習して、どんな指導を受けているのか、高校生になるとどうしても小学校、中学校に比べて保護者が手を離してしまいがちだが、もう少し興味を持って子ども達に聞いてみる、また周りからの情報を得ていくことも必要だと思う。
- ・併せて、国語・数学試験への記述式問題の導入については、果たして同じ基準で採点できるのかどうか、その辺り漠然と不安を感じている。
- ・次に、今回の議題とは少し離れてしまうが、現在保護者の中で割と関心に上がっていることとして、中学校の部活動の問題がある。教員の多忙化という課題をよく耳にするが、これを解消することと、いまの現状、中学における部活動への全員加入、義務化になっているような学校が多いと思われること、この2つが矛盾しているように感じる。実際、先生達はいろんな業務で大変な中、生徒全員が必ず部活動をやってくださいと言われていたことに対し、“どうして部活動は必ずやらないといけないのか”、“本当に部活動は必要なのか”といったところで、矛盾点じゃないかなと感じている保護者もいる。
- ・先生方の多忙解消のために外部コーチを導入することは、これは本当に保護者としては大変ありがたいことで、子ども達にとってもとてもいい方向性だと私は思っている。そうすることで先生方の負担は減るが、一方で、その負荷が外部コーチにかかっていく。つまり、負荷のかかる場所が変わるだけで、実際、大変なことには変わらないのだろうと思ったりもする。
- ・部活動が必須なのかということと併せて、部活動を学校活動と切り離してスポーツクラブのような扱いにできないのかとも考えたりするが、これについては我が子の部活動に対するモチベーションだとか、またスキルのレベルといったものにより賛否の状況が変わってくるという、非常に流動的な議論になると思うため、この辺りも含めて先生方の勤務状況と子ども達のスポーツに対する取組とがうまく具合にいくようになるといいなと思っている。

#### **(加藤部長)**

- ・続いて大羽委員にお願いします。

#### **(大羽委員)**

- ・鳥取大学附属病院で子どもの心の診療拠点病院事業に取り組んでいるが、本年度から心理士を一人増やしていただき、東部・中部の学校回りをする予算を計上していただき、非常に活動しやすくなっている。この場を借りて、お礼を申し上げたい。
- ・今日の話の中で2点、学力向上と英語教育について少しお話をしたい。まず学力向上の中で、資料では、特に算数Aの領域で学力が落ちているというように言われている。学校現場の授業レベルで何が起きているかということ、算数Aの問題の正答率が悪いということは、即授業の進度に影響していくと思う。そのため、基礎・基本の部分の流暢性を上げないと、なかなか思考力を上げるための時間が取れないということだと思う。そこが先生方の悩みであり、だから、その力をうまく上げていくにはどうしたらいいのか、私も算数を専門にしているので考えているところ。
- ・先ほど英語教育に携わる委員の話にあったように、やはり今、教育現場はアクティブラーニングという、“主体的で深い学び”の取組が推し進められているが、そういった学習のなかで



着けていく力とスキルとして何回も練習して身に着けていく力という2つの力があり、それをどちらかひとつの方法で進めようとするとはやはり無理があると思う。この2つをうまく組み合わせ、思考力を高めていくようなアクティブラーニングの面、それから繰り返し練習していく基礎・基本という2つの部分で設定していく必要があるんだろうと考えている。

- ・そこで1点、いい取組だなと思う事例をお話したい。ひとつは、埼玉県で行われている子ども達一人ひとりの成長を支えるという大きいテーマだが、何がこれまでの学力向上の視点と違うかということ、平均点で捉えずに、一人ひとりがどう伸びたという視点で捉えていこうという提案をされている。これは学校現場だけではできないため、学校や理化学研究所、日本財団と野村総合研究所などで構成する“学力向上コンソーシアム”といったものをつくり、学力調査などのビックデータをきちんと分析、解釈し、一人ひとりがどう伸びたかという部分で評価していこうとする取組である。
- ・埼玉県はこれらノウハウをオープンにするので是非使ってくださいと言っており、広島県や島根県、福島県などが今年2年目として参加している。鳥取県の人口は57万人規模と、かなり機動性が高い県だと思っているので、紹介した事例のように、平均点ではなく、一人ひとりが伸びていった何か証左というものがあれば、子ども達や先生方の意欲も高まるのではないかと思う。やはり先生方は一生懸命やっていたらしゃるんだが、個々の多様性がある中で、やるべきこと及びその結果がなかなかうまくマッチしないため悩んでいるところもあるので、今後、御検討いただければありがたいと思う。
- ・もう1点、英語の教科化について。英語教育のメソッドが、実は、ほかの教科でも役に立つと考えることが多いと思っている。というのも、英語を学ぶ元々のメソッドは、文化が違う、それからわかり方が違うなど、多様性というものが前提になっている。例えばアメリカでは多様な民族の人達に教えるというメソッドがあるので、それは私の専門の特別支援教育にも共通しており、視覚化や動作化、モジュール化をはじめ、個別で学べるICTの活用など、これらは総合的にうまくプログラムされている。先ほどの横井委員のお話にあったように、きちんとした英語が効果的に学べるプログラムというものがたくさんあると思う。こういったものが開発されているので、今後英語活動を学んでいく中で、先生方もとても勉強になるのではと思っている。こういうところも考えて、一人ひとりをどのように伸ばしていくかという、何かポイントがないかなと思っているところ。

#### (加藤部長)

- ・続いて石原委員にお願いします。

#### (石原委員)

- ・小学校での英語指導においては、先生によっては、説明にあったように心配や自分ができるだろうかという不安があるということだが、例えば、英語の講師の派遣団体というのがあると聞いているので、そういったところから英語の指導の仕方を先生が習うなど、先生の日常業務の中で英語を勉強する機会をもっとつくり、必要であれば英語の講師を派遣してもらって、先生方の授業を支援してもらおうというようなことも考えられるのではないか。
- ・また、高大接続改革について、英語の4技能入試っていう名前はすごく走っているが、技能と呼んでいるからには、ちゃんと技能になってほしいと思っている。現状のセンター試験で、例えば80分で読まないといけない英単語の数が4,000語ぐらい、さらに考える時間を合わせると大体1分間に100語以上は読まないといけない。そういう具体的な読む速さなどが技能のことだと思うが、それぐらい読めている生徒が一体どれくらいいるのか？今までのリーディングとリスニングの2技能のうち、そのリーディングに限っても、ちゃんと技能化されているのか考えると、ちょっと疑問点があるなということが言えると思う。
- ・英語教員の英語力のレベルが高いという高校の特徴のお話があったが、逆に言えば、英語の先生方からすると、生徒達は英語に興味があり英語が好きである、と行ってしまっていて、

それを前提としたカリキュラム・マネジメントになってしまっていないか、という懸念がある。例えば、10の内容を教えれば英語を好きな生徒は7、8は覚えるが、一方であまり好きではない生徒は10教えても1、2ぐらいしか頭に残らない。ザルで水をすくっているようなものと例える先生もいらっしゃるが、基本的な内容を繰り返し練習するような場がきちんと与えられているのか。

- ・例えば模試の過去問題、あるいは入試の長文読解みたいな課題を出す学校も多いと思うが、そうではなくて、実際に楽しく英語を読めるような副教材など、英語があまり得意ではない生徒も好きに使っていただけるような、そういった英語を鍛える場をちゃんと確保できているのかということがちょっと心配である。つまり、英語が好きということを前提に組み立ててしまふとなかなかうまくいかないんじゃないかなと思う。
- ・それから高校の魅力化について。農業高校などは定員に満たない状況が続いているが、農業のいまの実態として、機械化や情報の活用などもあって、すごくしんどくて、やるのが大変といったイメージからは随分違うことになってきていると思う。ただ、普段過ごしていて、そういった部分は目に入ってこず、完成品の農産物しか目にしないものだから、それらがどうつくられたのか十分にわからないといった現実があると思う。
- ・中学3年の進路選択の中で、勉強のできる生徒には普通科に行きなさいといった指導で終わっている学校も多いと思う。例えば、成績良好であり、かつ、農業に関心があって、地域貢献したいという生徒には積極的に農業高校を選択できるよう、農業に関する情報をきちんと提供していくことが必要である。
- ・続いて高大接続改革について。いわゆる一般入試、学力を測る試験だけじゃなくて、学力に加え、例えば面接やディスカッション、プレゼンテーションなど、単にペーパーテストでは測れない部分を測ろうというような入試を増やすなど難関大を中心にそういった話を聞くが、例えばそういう推薦入試やAO入試などに対し、誰が出願できるのか決めるのは多分学校側がそれを握っていると思っている。その中で、例えば推薦の枠が広がると、浪人した生徒等、そういった子ども達がその推薦入試を受けたいといった状況も出てくると思うが、このことに関してもやはり高校ごとに決めていくのかなと思う。どういう高校が推薦入試やAO入試を活用しきれているのか。あるいは、推薦などは認定基準を満たした上での話だと思うが、学校の裁量次第で希望したところを受けられなかった等、どういうふうに対応していくのか気になっているところ。
- ・こういう推薦入試やAO入試の強化の動きに対しても、デジタルポートフォリオなど、どういうふう勉強してきたかを記録するデジタルツールを出版社などが制作していると思うが、そういった取組はどの程度進められているのかお聞きしたいなと思う。

#### **(加藤部長)**

- ・続いて青戸委員にお願いします。

#### **(青戸委員)**

- ・中山間地域の県立高校で定員割れが生じていることから、県外からでも積極的に生徒募集ができないかということで、前回もお話があったと思うが、隠岐島前高校は、現在、大変多くの県外からの生徒がおり、私も隠岐島前の方にいろいろお話を聞いてみた。
- ・県外募集に際しては、キーパーソンとなる方がいろいろコーディネートしてくれたり、地域住民に対してしっかりと説明をされる、そういった方がいらっしゃり、その人が中心になってみんなで一緒に考えて取り組んでいる模様。やはり、県外の学校への入学に当たり、保護者の方はいろいろと不安があるということで、寮に入る生徒に対しても「島親」という島で身元引受人になってくれる方がついたり、その他、下宿やホームステイ、またはショートステイなど、地域の方の協力のもと、安心できる住環境の提供がなされている。県外募集するに当たり、現在、寮を整備するというのはなかなか難しい問題であるとは思っているので、自治体

と学校など関係者が一緒になって課題に取り組むことで、いろいろな協力が得られるようになるのではないのかなと思う。

- ・また、いろんな特色化や魅力化の取組において、結果、県内で奪い合になるようなことのないよう、やはり特色・魅力づくりを外に向けることで、県外の生徒にここで学びたいと思わせるような特色ある学校が生まれるのだと思う。
- ・鳥取県は、星取県ということで星空教育だったり、鳥取環境大学もあって環境立県、環境といった視点でもしっかりPRされているところなので、「環境」という面で県外にもっとアピールしていけばいいのではないか。環境教育にもっとしっかり取り組めるように高校に環境コースを新設する、また環境高校といった名前の高校をつくるとか、そんなところまで特色を出すのもひとつではないかと思っている。さらに美術館とコラボするような高校、またはコースの設置もいいのかなと思う。

#### **(加藤部長)**

- ・本日、上萬委員が御欠席のため、手元資料の一番下に上萬委員からいただいた「鳥取県総合教育会議意見書」という1枚物を配布させていただいた。上萬委員からは、体力、運動能力向上における新規取組であるワンミニッツエクササイズの全県普及展開とともに、もうひとつ遊びの王様ランキングについて、種目の精査や幼児・中学校での普及などについて御意見をいただいているので、目を通していただけたらと思う。
- ・続いて、教育委員の皆様の意見を伺う。鱸委員から願います。

#### **(鱸委員)**

- ・近年、鳥取県の人口が減少状態になって、地域創生とか人口減少対策とか、あるいは家庭の貧困問題、家庭教育力の向上に向けた取組など、いろいろ幅広い取組が教育委員会及び知事部局で進められている。
- ・教育に関する大綱の評価に関して提案したい。教育委員会及び知事部局が取り組む施策の中には、同様のテーマについて切り口が違った方向性の取組を掲げている場合があるが、非常に難しい問題というのは、概ね、教育委員会と知事部局が一緒になって、今後さらに連携を密にして解決していかなければならない問題が多々あると思う。そういう中で、いま現在、教育に関する大綱と教育振興基本計画は、基本的なベースが大体同じで、特に重点課題においては、教育の独自性の補完の視点から考えれば、それぞれ必要であると思うが、今後PDCAサイクルを回すに当たって、あるいは施策の進行状態とか評価、数値目標の達成についての検証においては、やはり項目によっては、その評価を一本化したほうがいいのではないかと考える。

#### **(加藤部長)**

- ・続いて佐伯委員に願います。

#### **(佐伯委員)**

- ・防災マニュアルの見直しについて、100%達成できてよかった。小中高、どこもそういうことができたんだと改めてうれしく思う。やはり月日経っていくと、少しずつ意識が薄れていくので、マニュアルを見直しただけでなく、日々の教育現場の中で、次の避難訓練ではこんなことに取り組んでみたい等、マニュアルを具体的な生きたものにしていく工夫が大切かなと思う。
- ・引き渡し訓練なども、今いろんな学校で行われるようになってきたが、実際にやってみると難しいのではないかなと思う。いらっしやらない保護者もいるため、代わりに来た方が事前に申請した人ではない場合、絶対に引き渡せない。では、そういった場合はどうするのか等、いろんな個々の問題が生じてくると思うので、やはりそういった事例も聞き取りしながら、現場でよりよいものに更新され、鳥取県の防災教育が進んでいけばいいなということを感じたところ。

- ・それから運動能力に関する部分は、上萬委員の御意見にもあったように、ワンミニッツエクササイズなど、とてもいいものが出来ているなどと思うので、ぱっと飛びついてすぐに廃れていったり、飽きられてしまったりということにならないように、少し改良する、学校独自のものに切り替えていくなどにより継続して取り組み、子ども達の体力や運動能力が向上していくようになったらいいと思う。
- ・それから気になっていたのが英語教育の件で、先ほど横井委員、長曾委員からお話があったように、現場の先生方の不安感がすごくあると思う。ただし、不安だけれども先生も一緒になって練習する。例えば本当に短時間、毎日少しずつ同じことをやっていくことは、さっきのお話にもあったが、そういう繰り返しの練習の中で、子ども達とともに学びながら、先生も発音がよくなったね、みたいな感じにもなっていくということで少し気持ちが楽になった。やはり、教える側が不安がっていると、子ども達もちょっと大丈夫かなと思ったりするので、ともに学ぶという姿勢を持ちながら、石原委員もおっしゃったような外部からの支援を活用して、小学校の英語教育が順調に進んでいくよう見守っていききたいなと今改めて思っている。
- ・それから気になったのは高校生のことで、勉強することの充実感を感じる割合の高校2年生の結果があまりよくなかったことと、それから日々自分で計画を立てて勉強している児童生徒の割合が小中高と上がるに従ってどんどん落ちていることが、私は、これはちょっと大変な問題だと思う。やはり、押しつけられるものではない学びを目指している訳なので、そういった学びを高校生が実感として持てるような授業改善をやっていかないといけないと思う。高校現場の先生方の意識に差があるという課題意識もあるようだが、やはりアクティブラーニングに対するちょっと苦手意識というか、結果を早く出そうとして教え込んでしまいがちになるということもまだあると思う。長曾委員のお話にもあったように、両輪だと思うので、やはり子ども達が意欲を持って学んでいける環境になるように、もう少し県教育委員会側も考えていかないといけないなということ、今回の資料を読んで改めて感じたところ。

**(加藤部長)**

- ・続いて坂本委員にお願いします。

**(坂本委員)**

- ・高校の魅力化については、自分の特長を生かすにはこれしかないと思えるような、そういう高校になるべきだなと思う。近くの高校生が過疎の村で石積みを体験するという授業があったが、この石積みも昔から延々と伝えられた技術であり、あれもかなり数学の幾何学などにつながるような、そういう授業だと思っており、近くの村のお年寄りには喜ばれるし、景観も守られるという、この授業は本当に専門学校の貴重な授業であると思いながら見ていた。
- ・そういった面でも、高校の魅力化と今回の文化財保護行政の知事部局への移管は、ちょっとつながるなと思っている。国重要文化的景観とか、あるいは賀露や青谷の日本遺産等の認定においては、景色だけじゃなくて、そこで暮らす人の営みや歴史など、いろんなものを全部プラスされて認定されるものだと聞いたことがあるので、これからのふるさと教育をつないでいくためにも、延々と続いてきた地方ごとの技術や営み、伝統文化などの地域資源を鳥取の強みとすることで、文化財保護や高校の魅力化などの面で鳥取のカラーが出てくると思う。

**(加藤部長)**

- ・続いて、若原委員にお願いします。

**(若原委員)**

- ・英語教育の推進についてお話ししたい。大学で、いわゆる一般教育、教養教育の中で英語を担当している先生は、従来は英文学や英米文学を専門とする先生が担当されているケースが多かったが、近年はもっと英語のコミュニケーション能力を重視されるような、いわゆる実用英語の力のある先生が増えてきている。我々が中学校・高校で教わった先生方は大体が文学専門の先生だったように思うが、そういう2つの傾向、系統があって、大学教育の中でもこ

ういう2つ見えない溝があって、ときには深刻な、例えば教員の採用人事のときに、どっちの専門の人を入れるかなど、深刻な問題があったりもするが、英語教育の推進についても、基本的には何を指すのかということ、ひとつは大前提としてはっきりさせて、しっかりと確認しておく必要があるんじゃないかなと思う。ただ、大学入試の英語の試験が変わりそうだから、それに合わせて英語教育も改善していくようなことでは、やはりよくないのではないか。

- ・次に県立高校の特色化、あるいは県外募集の件について、応募者を増やすためには、当然、わざわざ県外から来てもらう訳なので、よほどしっかりと、はっきりとした特色を持たせる必要がある。特色化、本県で言うところの「重点校制度」というのは、大変意味の深い、意義深い制度であると思う。この重点校制度というのは、生徒確保のためだけではなく、中学生あるいはその保護者も進路選択の際の情報提供としても必要なことであると思う。県下各高校において何に重点が置かれているかを見ると、大学進学重点校は東・中・西部の都市部のいわゆる伝統校に限られているようだが、中山間地域の学校でも取り組んで効果を上げることができるのではないか。と言うのは、今日資料でいただいた島根中央高校の状況を見ると圧倒的に県外から、しかも本当に全国から生徒が来ている。そして、取組を見るとやはり進学を非常に重視している、そういう体制を組んでいることがわかるので、これもひとつ参考になるんじゃないかなと思う。
- ・それから、県立美術館の件。これは美術館だけではなく、倉吉未来中心の辺り一帯を倉吉市と連携して、是非、総合的な文化ゾーンとして、文化公園のような形で開発をお願いしたい。それから、少しの先の話になるが、作品の購入予算を是非、奮発していただきたいと思う。どれくらいの予算なのかはよくわからないが、他の県立美術館や本県の県立図書館の予算などを参考に、是非作品購入の予算をしっかりと、大いにつけていただきたいと思う。
- ・高大接続改革については、縦の接続、横の連携と言われるように、接続というのは高大だけではない。どうしても高大が目されるが、小・中、中・高の接続について、十分な対応がなされていない面があるかもしれないと同時に、小中高という現在の区切りのままでいいのかということも一考の余地があるのではないか。最近、義務教育学校や中等教育学校など、大分柔軟化されてきているので、この点も合わせて接続ということを考えた場合、再検討が必要ではないかと思う。

#### (加藤部長)

- ・続いて中島職務代行者にお願いします。

#### (中島教育長職務代行者)

- ・初めに知事が申し上げたが、協約のところから国の歩き方を先取りする形でこのようなコミュニケーションの場があり、特にこの総合教育会議になってから有識者の皆さんからいろんな形で御意見をいただき、我々も、普段考えていることとは違う切り口で御意見いただけることは大変貴重な機会だなと思っている。私ども教育委員会は、基本的には合議制の執行機関なので、こういった場でどれくらい個人的なスタンスの発言をしていいのか、悩みながらの発言ではあるが、皆さんの発言を踏まえながら、最近ちょっと感じていることをお話させていただく。
- ・私も現場の学校に出ていくことがあり、その中で一番課題だなと思うのは、やはり子ども達の、これは小学校から始まって高校まで、あるいは大学も含めてそう感じる訳だが、自己肯定感が非常に低い、ということ。要するに、言われたことは真面目にやるけれども、じゃあそれであなたはどういうことに自信があるのか、またあなたはどういう者になりたいのか等を問われると、急にすごくネガティブになるというか、将来の夢を語らない、自分の可能性を、どこまで本当かわからないけれども、何か信じていないような発言がある。
- ・人にはそれぞれ得意なことや可能性があり、それぞれの可能性を相互に認め合うことにより

互いに成長していく、互いに尊敬し合えるということを、どうやったら成長段階に応じて与えていけるのかということが、基本的には一番大きい問題だと思っている。結局、そういう感覚がなければ、知識・議論を基にして、思考力・判断力・表現力ということに、なかなかつながらないと思う。つまり、各教科の学びの一段下にあって、学力を支える、いわゆるマインドの部分というのをどうやって強めていくか、豊かにしていくのかということがすごく大事なんだと思う。そのマインドの上で、それぞれの個性が伸び、自分はこの教科が得意だとか、この教科をもっとやりたいみたいなことにつながっていく。その土台のところをどう鍛えるのかなということ、いつも課題だなと感じている。

- 高校の魅力化、個性化については、鳥取県の教育にとってすごく重要な課題だと思っている。例えば、大学教育が変わることで高校より下の教育が自然と変わっていくように、鳥取県において、特に県教委としては、高校の教育をどのようにしていくかということが、中学校・小学校・幼稚園まで含めた教育についての強いメッセージになるものと思っている。
- その中で、現実問題として、生徒が必ずしも定員に満たないことも踏まえながら、県外からの募集については、こういうことばかり言っても、来たい人がいないという状況になってしまう訳で、さきほど石原委員もおっしゃったが、やはり各高校が農業や工業、商業など、それぞれの学校の個性をより出していくことでそれぞれの学校がそれぞれの道に進んだときの未来を、より具体的、魅力的に生徒にそのビジョンを見せることで、その専門の高校に進もうという子ども達が増えていくことにつながるのではないかな。そういう各専門高校の、総合科もあるが、それぞれの高校の魅力化は、現在の県教委にとって極めて喫緊の課題ではないかと思っている。
- 次に教員の多忙感についてだが、これは要するに、いろんなことを支えている先生の余裕をどうやってつくっていけるのかということ。これもずっと話題にし続けているが、なかなかいい解決策が見つけられていないというのが現状である。その中で、部活動をどうするかということについては、運動部系のことは割合よく話題になるが、運動部だけではなくて、文化系の活動を含めて、子ども達にどれだけ多様にそれぞれの才能を伸ばす機会を提供し、さらに、そもそも全加入かどうかといったことも含め、生徒それぞれが選べるようにして、そして教員の負担ということではなくて、しっかりとした指導者に然るべき指導を受けられる体制をつくるかということについて、県教委の中でもいろんな方に御意見をいただきながら話をまとめていきたいと考えている。
- 美術館については、一体どんなデザインになるのか等皆さんが具体的な興味を持たれる中、いま、基本設計に進んでいこうというところ。私どもが、主に私が言っていることなんだが、表れがユニークになることだけではなくて、プロポーザルを含めて、どうやってアイデアを募集するのか、プロセスも含めた鳥取県内のオープンな形、つまり鳥取県はこんな形で設計のアイデアを募集している、いろんな人に可能性を開いているというようなことができると、そのプロセスも含めて非常にクリエイティブになっていいのではないかな。何とかいい方法はないですかね、みたいなことを今、探そうとしているところである。
- 文化財保護行政の移管については、基本的には、やはり専門性を持ってしっかりと保護管理していくということが重要である。もちろん、それだけでは今の時代の中で文化財の意味というものがわかりづらいといった課題意識だろうと思うが、大事なことは、やはり文化財は過去の歴史を読むこと、過去の人間を読むことであって、過去のものではあるが、それを通じて私達の未来を予見するのに非常に役立つというところに重要なポイントがあると思っている。そういった文化財における今の私達の生活とのつながり、未来とのつながりにある価値をどのように発見して、どのように発信していくのか。要するに、この価値発見、価値発信、価値を創造していくという部分がやはり非常に専門性の高い分野かなと思うので、こういった価値を考え、発信していくということに関する専門性をどういう人に担ってもら

のかといった部分が鳥取県のオリジナルティの発揮のしどころではないかと思う。併せて、美術館とどういった連携をしていくかということも、すごく重要なことになるのではと思う。

**(加藤部長)**

- ・続いて山本教育長にお願いします。

**(山本教育長)**

- ・いつも貴重な御意見をお伺いしているが、なかなかできてないことも多々あるなどの思いから、この会に出る度に、その日は大体反省とともに、ずっとモチベーションが下がったような状態になっており、何とかそれらを実現する工夫をしていければと思っている。御質問も何点かあったので、そうしたことも含めてお話をさせていただきたい。
- ・横井委員からは英語マインドを育てることについて、何点か御提案も含め、お話があった。イングリッシュキャンプについては、県においても、学校ごとということではないが全県的に取り組んでいるところで、このような取組がもっともっと小さい単位で広がっていくよう、何らかの工夫を考えていけるのかなと思う。また、環境大学の英語村といった取組もあり、こうしたものも十分に活用できているのか、全県を含めて、英語をしゃべらないといけない状態に何とかして持っていくことも大切なことだと思うので、いろいろ工夫をさせていただければと思う。
- ・横井委員、津島委員からお話がありました高大接続について、情報が中学校サイドに十分伝わってない、あるいは中学生の保護者に伝わってないという部分は大いに反省しなければならないと思っている。我々も高校サイドには結構話をしているが、言われてみると中学校側、市町村の教育委員会にはある程度説明をしているものの、もう少し丁寧にいろんな情報が伝わるような形で工夫をさせていただきたいと思う。
- ・長曾委員からお話のあった英語教育等々について、今、文部科学省において、中高におけるオールイングリッシュの授業の実施を進めているが、必ずしもオールイングリッシュばかりでいいのかといった御指摘をいただいたので、この部分については再度、どういうやり方が効果的なのか考えてみる必要があると思う。現場サイドでは、かなりオールイングリッシュでやることについて躊躇があることも事実であり、いま現在、どちらかという、その躊躇を取り払って全部オールイングリッシュの授業を進めていこうとしている段階なので、本当にそれが効果的なのかどうか、その辺りの検証も一方では要るのかなと思いながら話を聞かせていただいたところ。日めくりカレンダーなども、しっかりとこれからも活用をしていければと思う。
- ・津島委員から部活動の話があったが、おっしゃるとおりで、全員加入の話など、そこはどうかあるべきか。これについては県議会でもいろいろ議論があって、実はこういう種目がしたいのに中学校にはその部活動はなく、しかも全員加入になっているので、どうしてもどこかの部に参加しなければならないというような課題も出ている。教員の働き方改革や子ども達の健康のことなど、いま、部活動全体のあり方を少し見直していく必要があるのではないかと思う。先般も学校関係者、それから競技の関係者など集まって、いろいろ意見交換をしたところで、何回か議論を重ねながら鳥取県なりのいい部活動のあり方について研究して取り組んでいければと思う。
- ・大羽委員からは、基礎力を高めるために埼玉県が一人ひとりを追っているというお話があったが、私も詳しくは承知をしていないが、一度この取組を拝見しながら、検討させていただければと思う。
- ・石原委員からは、推薦入試あるいはAO入試のご質問があったが、いま、推薦入試の場合は、制度上、浪人生がその推薦入試に向かうことはできない状況にある。AO入試については、学校を通さなくても出願できるため、そちらは困ることないが、推薦入試において、もし、そうしたことで困られることがあれば、それは国でも少し議論をしていただく必要があるの

かなと思う。また、デジタルポートフォリオについて、これは学習履歴を蓄積し、入試の際の調査書など提出書類として使うもので、研究段階だが、関西学院大学が無料で利用可能なeポートフォリオというのを研究しており、昨年、全校を集めて説明会を開催して倉吉東高などで実証的にやってみようと、いま、計画を立てている。その他にも有料の民間システムもあることから、一部高校で昨年度から利用している学校もあり、こういった情報も参考にしながら、これから取り組んでいきたいと思う。

- ・青戸委員からは、高校の魅力化について、島根の事例なども出していただきながら御提案をいただいた。確かに住環境の整備等々悩ましい部分があり、この部分は地元の自治体と連携しながら、いい下宿先を探していただくような取組にも力を入れていきたいと思う。また、鳥取のよさを生かしたような新しい学科やコースなど、こうしたことについても臆することなくいろいろと検討し、取り組めるものについては取り組んでいきたいと思う。

#### (加藤部長)

- ・途中で御発言を控えた委員もいたと思うが、追加でもう一言ご発言されたい委員は？では、横井委員にお願いします。

#### (横井委員)

- ・英語が入ってきたので、現場の先生が、小学校も中学校も、また高校もかもわかりません、皆さんが大変になっていらっしゃるが、AIを使った英会話のロボットが出て来ている。これは2、3万円台のものから二十数万円ぐらいするものまであるが、そういったAIを活用した英会話は、個人のデータが蓄積されていくので、その人の喋りの癖とかも含めて、そのロボットは覚えてくれるため、逆に間違ったことは訂正してくれることから、先生方の負担を減らそうと思えば使えるのではないかと思う。うちでは、もう既に、実は英作文でAIを活用している。英作文をパソコン上で作文すると、それをAIが判断し、単語のスペルの間違いだとか、言い回しや文章の言い間違いなど第一次的な添削をやって、その部分にマーカーがついて返ってくる。それを今度は教員と生徒が見ながら、こういった表現のほうがよかったね、みたいな話をしながら直していくといったことに取り組んでおり、仕事の量としては軽減されている。
- ・それからもう1点。鳥取県の強みとして、図書館の司書が高等学校などではちゃんと揃っている。さきほど学習のモチベーションの話があり、生徒が小中高と進むに従って、だんだんと勉強しなくなっているという様子が分かると思う。これは部活動に一生懸命ということも一因にあると思っており、とにかく高校3年の6月が終わらないと受験勉強にもかかれない。都会ではとっくにもう受験の体制が固まっており、出遅れてしまっている訳なんだが。それで、図書館司書がこれだけ揃っている県はそうそうないと思う。うちもいま図書館を利用した学習というものをやっており、これが非常に生徒のモチベーションを高めていくのがよくわかっている。我々の学校の場合は、各教科でシラバスをつくる段階で年間にどこでどの範囲をどこの部分について図書館を利用した学習として行うのか各教科で決めて、そのシラバスを全部図書館司書が集めて年計をつくり、その年計に従って各教科で展開している。
- ・いろんな教科がコラボすると、図書利用というのは非常に効果を発揮すると思っている。例えば古代の遺物を英語で説明したり、また日本語の古語で説明したりして、それを生徒が作文する訳だが、それを今度は英語のものを見た生徒は日本語に訳する、古語のものを見た生徒は現代語に訳するなど、このように班ごと分かれて、遺物についてのいろいろな説明を日本語の古語、それから現代文語、それから英語で行ったところで、これは社会科と国語と英語のコラボなんです。このようなことをやっていく際、図書館を活用した学習というのは非常に役に立っており、こういったことでモチベーションが高まっていく、興味関心も広がっていくということもあるのではないかと思っているので、そこら辺を是非推進していただければと思う。



**(加藤部長)**

- ・では続けて、若原委員にお願いします。

**(若原委員)**

- ・私、ひとつ申し上げたいと思っていたのは、今日の意見交換の論点には上がっていないが、人口減少と後継者不在の問題。私は中部の郡部に暮らしているが、いま地域では、お年寄りだけが住んでいて、若い人はどこかの都市部に出て行ったきり、定年になっても帰ってくる見込みがないというようなお宅が増えてきている。家の制度の崩壊といったら大げさになるかもしれないが、家を継ぐとか、家業を継ぐという意識、習慣が薄らいできてしまっているように思う。
- ・昔は、昔と言っても我々が子どもの頃は、長男は大学には行かせないとして、高校を卒業したら家を継げ、というような、いまだったら当然大学進学をしているような人でも高校卒業しても進学せずに地元でずっといるという方がたくさんいた。いまはそういう訳にもいかなないので、高校を終えた後、多くの人が都市部に出ていっているが、定年になっても、もう都市部に家を構えてしまって、家族もいるため、こっちへ戻って来られない。そのため、こちらにある家は消えていくしかないという、何か非常に寂しい状態が広がっている。私も何も名案がある訳ではないが、Uターンなり、Iターン、Jターンなり、何か有効な手立てを打てないものかと、いま非常に身にしみて感じている次第。

**(加藤部長)**

- ・最後に知事をお願いします。

**(平井知事)**

- ・今日はいろいろと有識者の皆様、そして教育委員の皆様から大変貴重な御意見が活発に出た。
- ・いくつか大きなテーマがあった中、1つは英語教育について非常に多く取り上げられたように思う。やはり教育現場でも、オールイングリッシュの授業が始まることに対して、どうしたらいいのかという不安感もあるのかもしれないし、また、こういった取組もあるよといういろんな知恵もあり、先ほどもお話があったが、イングリッシュキャンプのようなやり方もあるのではないかと思います。実はいま、バーモントと姉妹交流をしようと、うまくいけばこの7月にやろうと取組を進めており、従来から子ども達の交流はしていたけれども、やはり向こうに行って帰って来ると大分モチベーションが上がり、また向こうから来た子ども達を受け入れることでもモチベーションが上がる。やはりそういう化学反応、ケミストリーという感じだと思うが、化学反応を起こすような感じがする。
- ・せっかく御提案もあったので、一度、イングリッシュキャンプ的なやり方について、ひとつずつの学校だけじゃちょっと難しいのであれば、複数の学校をまたがった形でやるという手もあるのではないかと思います。そうしたことも含めて、英語教育は今、大きな変わり目にあるので、そこをどうコントロールしていくのかということではないかと分かったところ。さきほどAIロボットだとか、AIの添削というような手法も出てきたが、いろいろとそうしたツールも広がってきていると思うので、是非、少し広めに情報も収集して、英語教育もこの際、鳥取のひとつの特徴ある教育分野のようにできないかなと感じている。
- ・高大接続についても、中学生など、あるいはさらに言えば小学生も含めてかもしれないが、特に高校受験する中学生まではきちんと伝わらなければならない訳で、是非、高校生とはこういうものですよといったことも含め、あるいは大学に行くということはこういうことなども含めた、そういう何かパンフレットあるいは手引きがあってもいいのかなと思う。いま、ちょっと変わり目なので、親御さんや生徒にも伝わるような、そうしたことに取り組んでいく必要があるのではないかと思います。御提案もあったので、一度教育委員会と具体的なやり方を協議させていただければなと思う。
- ・高校の魅力化についても多く取り上げられたと思う。先ほど教育委員会の御提案も拝見した

が、多分これでは島根県みたいな劇的な変化というのは起きないような気がするんですね。現に、いままで県外募集枠というのをつくって、八頭高など確かに入学している学校もあり、智頭農林も年によっては入っているが、ただ、その数も限られており、正直、日野高校とか、ここは県外募集の取組において一番騒いでいるところだと思うが、一人も入って来ないという状況にあって、これは取組が中途半端になっているのかもしれない。本当に特色ある教育をやったり、地元で、それこそ島での島親をつくるという御提案もあったが、そうしたことをやらせてみたらどうかと思う。こういうような横並び方式での特別枠ということではなく、特区的にやらせてしまうということから始めてもいいのではないかと思っている。そうしないと、なかなかこの高校の魅力化というものは出来にくいと思う。

- ・日野とか、岩美も、大体但馬のほうは岩美高校を飛び越えて鳥取西高に来てしまっており、なぜ岩美高校に入らないのかなというところもあって、そうすると別の考え方もあるのではないかとの思いから、もう少し思い切った方法も検討してみる必要があるのかなと思う。多分、島根県の場合は、このまま生徒が減ってしまうと高校がなくなってしまうのではないかといった地元の危機感もあったと思う。それだったら地域みんなでやろうよということだが、うちの教育委員会の場合は、高校はなくなさないということを前提に出発するため、地元で危機感がなかなか生まれないのかもしれない。ですから、もう少し手法を考えながらやったほうがいいのかと思う。
- ・若原先生をはじめ、いろいろお話があったが、やはりこれからの子ども達を地域で活躍してもらおう人材として育てていくということに対し、もっと意識を持ったほうがいいのかということ。確かに石積みをするとか、そういう特徴あるやり方というのが、地元でもお年寄りも助かるし、また高校生も勉強になるし、ふるさとを愛するきっかけにもなるかもしれない。要は住民の皆さんのコミュニケーションも取れる。実はいま、年度初めということもあり、例えば地方創生とか、あるいは職業の関係での雇用対策などいろんな会議で、民間の皆さんみんなおっしゃるのはふるさと教育について。それを我々県がお聞きしているため、高校だけで始末しろということになるんだが、本当は小学校・中学校の段階からそのふるさと教育というのをやはり根付かせていかないといけないと思う。そういうことがあれば、若原先生もおっしゃるように、地元へのフォローと大切なものを引き継いでいこうという、そういう人材も生まれてくるのではないかと思う。
- ・その他、例えばワンミニッツエクササイズとか、最近やってみて非常に効果があるものなど、おもしろい挑戦も出てきたと思うので、いろいろとこれからもチャレンジしていただくよう、我々もしっかりとサポートさせていただきたいと思う。

**(加藤部長)**

- ・以上で、第1回総合教育会議を終了する。